

「お金持ち」の階段

ゴルビー 長田

お互いに引越すことができない隣国同士でありながら、我が国と中国が睨み合
いを始めて緊張が高まり、万一戦争になったら……、不安を覚える僕の^{まなうら}瞼裏に、子
供だった終戦当時、地獄のような食糧危機を生き抜く中で垣間見た、様々な人間の
姿が浮かび上がった。

先の大戦は、日本が無条件降伏して終結した。それで爆弾の雨は止んだけれども、
飢餓との戦いは終わらなかった。人々はこの戦いを、己の才覚で戦う他はなかった。
僕も、生きるために戦った。稀有な体験をしながら。

——その日も母に連れられて、鮎詰めの汽車に乗って農村に行き、農家を何軒も
回って拝み倒し、なけなしのカネをはたいて、ようやく米を一斗わけてもらった。
しかし、警察の目が光っている。母は知恵を絞って半分を、僕のズック製のランド
セルに入れて背負わせ、残りを自分の腹に巻いて妊婦を装った。

帰りの汽車も超満員で押し潰されそうだった僕は、下車する駅に着いてほっとし
た。ところが、汽車から降りると警官が大勢いる。ヤミ米の「一斉取締り」だ。捕
まっては元も子もない。必死の形相で、『命綱の米』を抱えて逃げ惑う人々。それ
を取っ捕まえて、容赦なく没収する警官。妊婦を装った母の米も没収された。だが、
ドキドキした僕のランドセルの米は無事だった。胸を撫で下ろす僕の傍らで、「何
日も食べてない子供が待っている。この米がなければ死んでしまう」と『命綱の米』
にしがみつき、警官に「あなた方だって裏でこっそりヤミ米を食っているでしょう。
食わなければ^と疾うに餓死したはずだ！」と^な突き叫んで抵抗する若い母親がいる。そ
れに反論できない警官が、「言いたいことは署で聴く」と言って力づくで連行する。
正に阿鼻叫喚の場景が、僕の^{まなうら}瞼裏に焼きついた……。

こうした食糧危機は、一面の焼け野原となった大都市がいつそう深刻で、せつか

く爆弾の雨を掻い潜って助かった命が、飢餓で失われる現実には、「何万、何十万人も餓死者が出る」と言われるほど逼迫していた。このどん底に喘ぐ祖国に、外地から同胞が続々と引き揚げてきた。命からがら、着の身着のまま。

祖国の土を踏んだものの、無一物になった人達のために、僕の住んでいたA市は、旧陸軍の兵舎を改造して「引揚者住宅」にした。

そこに住む悪友が、学校が春休みになった或る日、僕にそっと耳打ちした。「俺ン家にこいよ、いいことが有るぞ」と。

彼は、満州（現、中国・東北部）からの引揚者で、家ではろくに飯が食えないらしく、ガリガリに痩せて青白い顔色をしていた。僕も栄養失調で似た者同士、友達になった。それから腹が減って倒れそうになると、二人で他人様の畑に行き、生で食える大根や人参をががつ食って飢えを凌いでいた。大人に見つかってコラツとどやされ、ほうほうの体で逃げ帰ることがあっても、ひもじさが高じると背に腹は変えられず、またこっそり畑に行つて、大根などを失敬していたのである。

そんな悪友の誘いなので、僕はつきり食う物だと思った。なのに、「食う物じゃねえ」と言われて、腹がグ、グ、グーツと鳴った。

「食う物じゃねえなら、何だ」

「おもしれえことだ」悪友がニツと笑う。

「いったい、何がおもしれえんだ？」

「それは、口じゃ言えねえことだよ」

「もったいぶるな、言えよ！」

「隣の息子が小遣いもらつて映画に行った。今日は間違いねえ」と答えをそらせた悪友が、こう続けた。「母ちゃんも姉ちゃんもシツタイ（失業者対策事業）に行つたから、俺ン家には誰もいない」と。この二人のひそひそ話に「ちよい悪」が首を突っ込んで三人になり、ともかく悪友の家に行つてみることにした。

旧陸軍の兵舎は木造二階建てで、「引揚者住宅」になつても、外観は曩時（のうじ）の威容を保っている。玄関を入ると、「しー」悪友が人差し指を口に当てる。僕らは忍び足で廊下を進み、悪友の家に入った。家の中は旧兵舎の一室を、薄っぺらな杉板で仕切つて二部屋にしたもので、杉板一枚の隣には別な家族が住んでいる。でも、仕切りの杉板は二メートルくらいで、旧兵舎の高い天井まで届かない。その届かない空間は紙を貼つて塞ぎ、それぞれの家族は、一応プライバシーを保っている。

僕らが息を潜めて空き箱を踏み台にし、背伸びして仕切り板の上の、紙の穴から隣の部屋をそうっと覗くと、真っ昼間なのにカーテンが閉まって薄暗い。そこに男と女が……男の顔には見覚えがある。金縁メガネの、町で評判のヤミ成金だ。女は、部屋の主の戦争未亡人。ヤミ成金と未亡人の、特に未亡人の、息子には見せられない姿を目にして、アッ、と出そうな声を殺して固唾を呑む。同時に、やましさに襲われて逃げ出したくなった。にも拘らず、視線は吸い寄せられて瞬き一つできない。心臓が止まりそうな衝撃に、凍りついたイガクリ頭が三つ、好奇の眼を丸くしているとは露知らず、一戦終わると未亡人は、モンペを穿いてそそくさと出て行った。すると間もなく、別な女が入ってきた。な、なんと、その人の清楚な容貌は、永遠の処女と言われた女優、原節子を想わせる。娘だ、と悪友が囁く。ヤミ成金が垂涎三尺、娘に挑んでいった……。悪友が口じゃ言えねえことは、書くのも難しく、詳細は省略する。

それからほどなく、件の美人母娘は息子も連れて、一戸建てに越して行った。「カネはヤミ成金に出させた」との噂を残して。

新居に移ると、当時A市では稀な洋式の飲み屋、「バー」の開店準備を始めた。その店は、男相手の水商売、ホステスが多いに越したことはないので、磨けば光る「隠れ美人」の、悪友の姉さんに目を付けて、美人母娘はこう言って口説いたという。「お金の無い者は、顔の無い人間と同じで人格が無いの。生きている意味が無いのよ」

なるほど、世間とはそういうものか、と思った。僕が「糧飯かてめし（大根飯）弁当」も満足に持って行けないのに、「お金持ち」の家の子は、毎日教室で「銀シヤリ（白米）弁当」を存分に食っている。札束を積む「お金持ち」の屋敷には、ヤミ屋がヤミ米を届けるからだ。

それでも悪友の姉さんは、美人母娘に、「人間は、生きていること自体に意味が有ると思います。私はそう信じておりますから」

と言って、きっぱり断ったそうさだ。

とまれかくまれ、美人母娘が始めた「バー」は、若作りの母親もさることながら、原節子に比肩する娘の美貌がモノを言っていて、一部の「お金持ち」は例外で、日本中がノーマナーのご時世に、どこでどうカネを工面するのか知らないが、鼻の下を長

くした野郎どもがせつせと通って大繁盛。かくして美人母娘は、食うや食わずのその日暮らしから、「お金持ち」への階段を上って行ったのである。

——親が「お金持ち」になると息子も潤い、新しい服を着て、ポン煎餅やコッペパンを頬張り、ラムネを旨そうに飲む姿が、矢鱈と目につくようになった。それをカネの無い僕らは、指を銜くわえて見ているしかなかった。それが惨みじめで、いつそう空きっ腹を刺激する。

「俺ん家の朝飯、さつま芋がたったの一本、もう腹ペコだよ。お前、カネ持ってないか」

「一銭も持ってねえ」訊くまでもなかった。

「今は畑に行っても、大根も何も食える物がねえ。これじゃ死んじまう」

「死ぬ、なんて容易たやすく言うな！ 『人は生きるために生まれたのだから、命を粗末にしてはいけない』って、姉ちゃんが言っている」と目を剥いた悪友が、「実はオレも腹がペコペコだ。何か食う物を手に入れる方法はねえか」と思案顔になる。その渋い顔が暫くすると、「そうだ」と目を輝かせて膝を打った。

「あの息子からカネ借りよう。ヤミ成金と母ちゃん、それに姉ちゃんのこともある。その辺を突っつけば、ダメとは言わねえべ」

「うむむ……借りるなら、三人の方がいい」

例の「ちょい悪」も誘って、悪ガキが三人揃った。それで気が大きくなり、息子を人目につかない路地裏に引っ張り込んだ。

「頼みが有るんだ。少しカネを貸してくれ」

「な、何すんだ。カ、カネなんか無いよ」

「だったら、財布の中を見せてみる」

「手を放せ！ 放さないと母ちゃんに言うぞ」

青くなった息子が、「母ちゃんに言う」と口走ったその一言で、（お前の母ちゃんの秘密を誰にも言わないから）と、恩に着せて借りるつもりだったのが、逆に、何も知らない息子が、母と姉の秘密を知ったら……との思いがふとよぎって、言葉に詰まった。で、

「必ず返すと言っているのだ！ 貸せ！」

と、僕が凄んで見せると、渋々ながらも財布を出した。それを丸ごと貸してもらった。

「誰にも言うなよ、絶対に！ 分かったな！」

「うん」と息子が頷いた。僕らは安堵してコッペパンを買い、夢中で平らげた。食べ物も胃袋に入って腹の虫が大人しくなると、つと我に返った。「借りた物は早く返さないと、ヤバイことになる」と。目から鱗が落ちた僕らは、「何とかして早くカネを返す」ことに決めた。だが、肝心の「何とか」が思い浮かばない。懸命に模索していた。

なのに、息子が「カネを奪われた」と母親に言いつけ、母親からヤミ成金へ、そして僕ら悪ガキ三人は、目から火花が散って鼻血が吹き出し、顔が歪こわになるほどぶんどられた。

そのヤミ成金は、美人母娘に注ぎ込んだカネを、ヤミ商売で取り戻そうとして一段と危ない橋を渡り、「柿箱」に「ヤミ米」を入れて五十箱も貨車で東京へ発送した。その際、中身を「特産品の柿」と偽り、まんまと警察の目をすり抜けた。ところが、途中で箱が壊れて米粒が漏れ落ち、「柿箱」の中身が「ヤミ米」であると発覚、御用になった。かくして彼は、「お金持ち」の階段を踏みはずして、刑務所へ転げ落ちて行ったのである。

第10回文芸思潮エッセイ賞入選作品



ゴルビー 長田

一九三五年 生まれ

二〇〇五年 同人誌「随筆春秋」に入会

二〇〇六年 『書かざるは三猿の外』で「年度賞」佳作

二〇一二年 『ある孤独死』で「年度賞」優秀賞。

この間「随筆春秋」奨励賞三回受賞

二〇〇八年『男の証明』が、文芸春秋のベストエッセイに入選

二〇一二年「文芸思潮・第8回エッセイ賞」で奨励賞

二〇一三年「文芸思潮・第9回エッセイ賞」で佳作

趣味 釣り